

和歌體十種

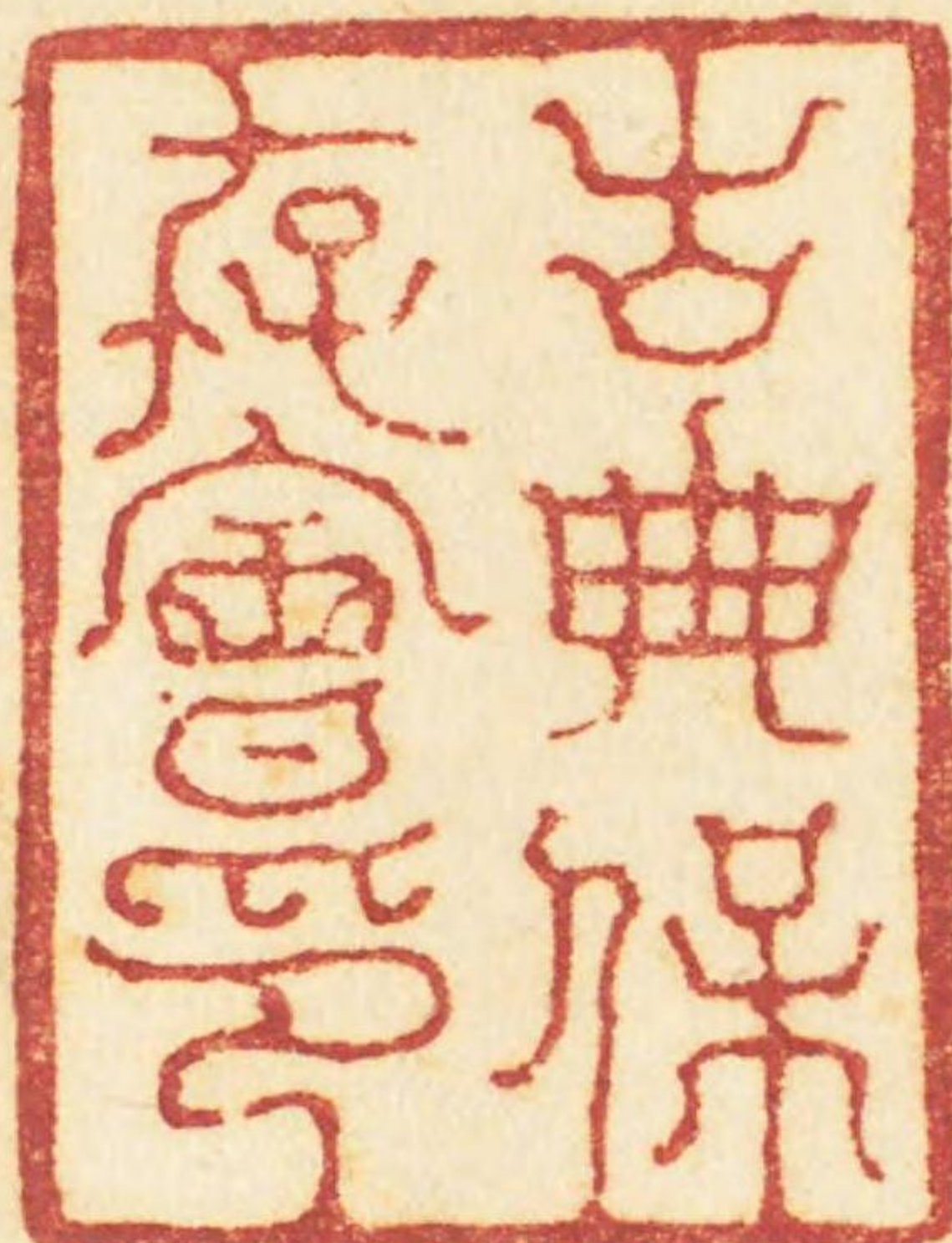
911107
M499w

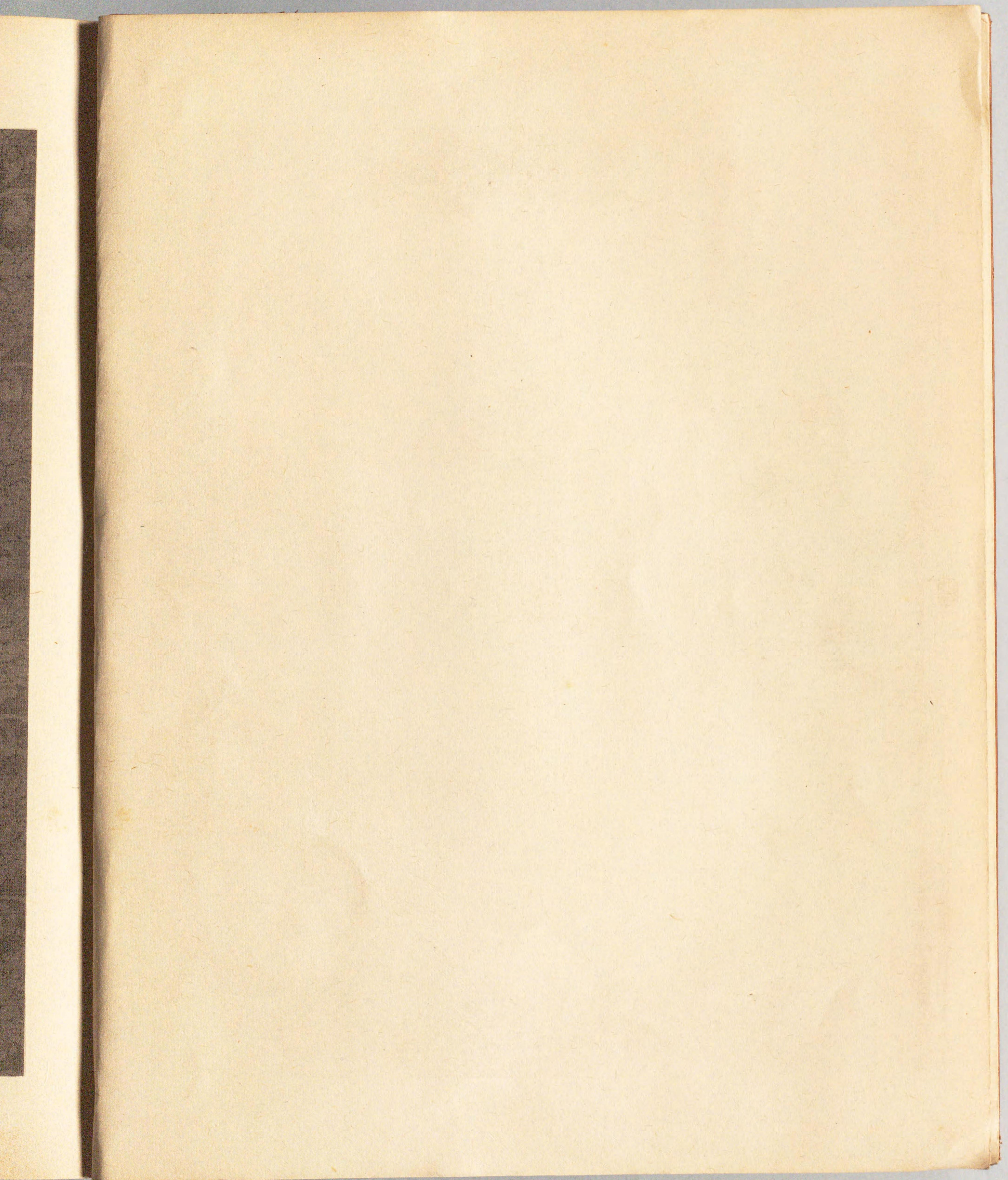
49w



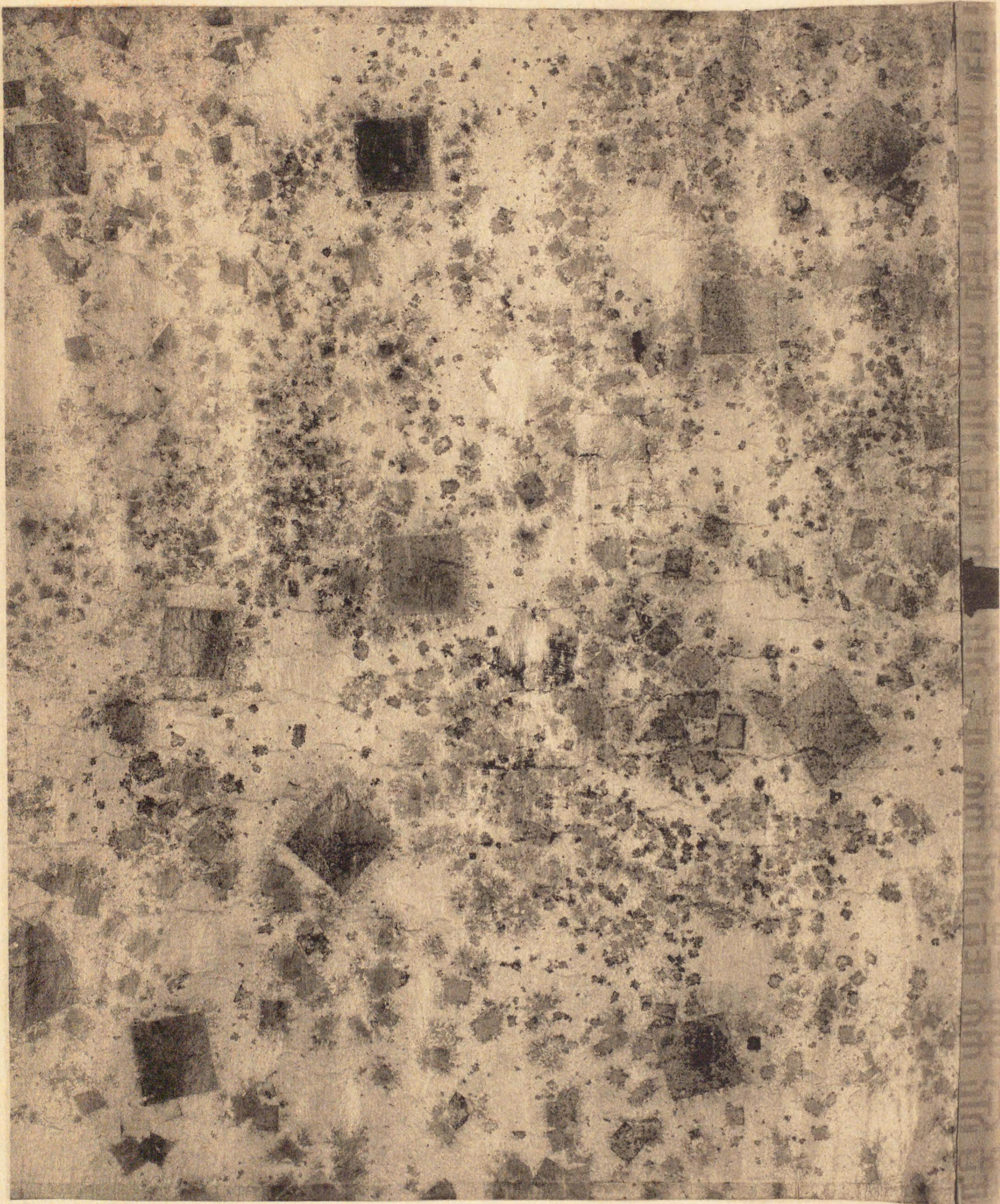
216536

911.107M449W











之和欵者我朝之風俗也興於神代感
干人世詠物諷人之趣同彼漢家詩章
之有六義然猶時世澆季知其體者少
至于以風雅之義當美刺之詞先師去
則刺史叙古今欵粗以音歸矣今之所
撰者只明外只之區別欲時習之易論
也于時天慶八年冬十月壬生忠岑撰

和歌體十種

古歌體

ちうのせしきさうへぬれみまよふあきくまきそ

しきさうなほはくこころのぶれきて

わののふしながらもらしきものひな

なみあつらひはなよれらる

いふこといふこと
まうねいとのあれいなるおかしさ

此處體義實に無曲折為得耳

餘情體

わらわのえみそらまら人おちめな

まのちかきあし

いまむしりいひちあなちのいふ

あめらそのよはあめら

あまのこゝろ

かきとひにいらふちのさかたにさかたに

ほのろたふちのさかたにさかたに

かきとひにいらふちのさかたにさかたに

ひのめいしらぬみあしをさかたに

わきとひにいらふちのさかたにさかたに

ひのめいしらぬみあしをさかたに

是體詞標一行義龍可端

寫思體

わんはひま
みちゆか
あゆみ
し

此體者在曾難頭事在于口難言自
想心見以歌寫之言語道新玄又玄也
况与餘情混其流与高情文具汎
自非大巧可以難決之

高情體

あつあつ
あつあつ
あつあつ
あつあつ
あつあつ

とてのめはなすむは ぼくもあはれ

あはれとすむは ぼくもあはれ

あはれとすむは ぼくもあはれ

あはれとすむは ぼくもあはれ

あはれとすむは ぼくもあはれ

あはれとすむは ぼくもあはれ

あはれとすむは ぼくもあはれ

あはれとすむは ぼくもあはれ

高き法よりある一ありのふれ月

此體詞雖凡流義入幽玄法歌之為下

科也莫不任高情仍神妙餘情器

量皆以出是流而只以心匠之至に妙

難強ふ其境待相南於素樞而也

器量體

たのむるをけはるる。たのむるを

たのむるをけはるる。たのむるを

むめのまうれとむ...
むめのまうれとむ...
むめのまうれとむ...

あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...

うまのまうれとむ...
うまのまうれとむ...
うまのまうれとむ...

あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...

あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...

あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...

あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...

あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...
あまのまうれとむ...

此體与高情難辨与神妙相混然只
以其制作之卓率不必分義理之文

通身

比興體

中一のうしろはるまはせしうらむの
にほふかなるこゝもさうさ
たれいんさうはひまゝにせりあも
まじりあまあまのふりあ

せ
は
次

...
は...
...
...
...
...
...
...
...
...

此體如毛詩^者標物顯心也豈不具義
只以俗所之之有興假其一行之名

也

華艷體

むらさきまはるさきうらなはるさき
たのしみもいふをわたり
さしひかへるものなほあはれ
いふもいふをわたり
そとあはれいふものなほあはれ
いふもいふをわたり

うはらわししとてをては秋をよ
まねぬちよみはたをけしはゆれ
わらわらまらまらなまはるあはれ
は山のふもとしらよたあぬ
しらふれとをこわ。たのあぬは
こころをたぬあぬしのこころをさる

此體古歌之所好信之云曾不然不

詩風耳之義

右和歌體十種一卷者 席有之

御子丸一流忠家卿御真筆也家可謂少孫者也
忠家卿者五條三位俊成卿之祖父也女間希有之
物種之或人依御取也禮之而已

唐字玉曆

八月仲旬

唐字
玉曆
三

安田善次郎氏藏 和歌體十種 解説

本書は世に忠岑の和歌十體と稱へられてあるものの實物にして今、安田善次郎氏の藏に歸せり。

この書は一軸の卷子にして桐の箱に納めてあり。箱は春慶塗にして、緑色の紐をつけたり。蓋の上に「忠家卿筆軸物」と記せる紙を貼し、身の前側面には「亥參番、忠家卿、歌物卷」と三行に書ける紙を貼せり。表紙は薄藍地に茶色にて蓮花一重蔓の紋様を織り出せる萬曆緞子を用ひ、發装の竹を包みて折りかへせる所は、その織留を用ひたり。幅九寸五厘、少しく破れたる所あり。紫の組紐を緒としてつけたり。見返は白き箔紙に金銀の切箔を置きたるを用ひたり。軸は牙軸なり。全體を通じて金銀砂子を置きたる紙にて裏打を施せるが、表紙及び裏打は後に施せるものなり。

紙の高さは八寸六分五厘弱、表紙より軸までの長さ、一丈二尺八寸一分五厘にして、本文の部分の紙は一丈七寸五厘なり。本文の用紙は薄様烏子紙にして藍及び紫の飛雲ありて、すべて七紙、その各紙の長さは

第一紙 一尺六寸八分

第二紙、第六紙 一尺七寸一分五厘

第三紙、第五紙 一尺七寸二分

第四紙 一尺七寸二分五厘

第七紙 五寸一分

なり。第七紙の短きは後に切り去られたる爲ならむことは下にいふ所にて知らるべし。これらの紙には所々に蠹蝕あれど、裏打あるが故に著しくは見えず。本文を記すに界線を加へず。第一紙は空白一行分程ありて本文十八行を記し、第二紙は二十一行、第三紙乃至第五紙は各二十二行、第七紙は六行にして、すべて百三十三行に書けり。本文の次に別の烏子紙、一葉長さ一尺二寸一分のものを加へたり。この紙も後に加へたるものにして、そこに古筆了佐の極めの語を記しその後餘白七寸程ありて軸をつけたり。第一紙と第二紙とのつぎめに、上の端と下の端とに近く、各「一」と書き、第三紙と第四紙とのつぎめに、下端に近く、「二」と書き、第五紙と第六紙とのつぎめに下端に近く「一」と書けるは表装者の心覺の爲に加へしものにして後のものたること疑なし。

文字は全部一筆にして朱なし。所々誤脱を補訂せるものあるが、同筆と見ゆ。奥に記せる古筆了佐の極め書には之を御子左忠家卿の書とせれど、その證なし。之を忠家卿筆と傳ふる柏木切又仁和寺切等に比するに、異なるものなれば、了佐の極めも如何あらむか。今、その書體用紙を以て推すに平安朝の末より下るものにあらず。書風は行成の流に屬す。古風を學んで到らざる所あるものの如くにいふ説ある由なれど、流暢にして溫雅と評すべく、時代も忠家卿の時より甚しく下るものにはあらずして、筆蹟としても鑑賞に價するものあり。

本書には慶安の頃に了佐が極めを加へたるを見、又この了佐の奥書までを寫せる傳寫本が、岡本保孝、木村正辭と傳へられて今佐々木信綱氏の藏に歸してある由なれば、世に絶えたるにはあらざりしこと今は知られたれど、何故か之を學界に提供する人なく、古來佚書と信ぜられて、學者のあこがれの的となりてありしものなるが、かつて名寶展覽會に出陳せられて吾人をして驚喜せしめたるものにして、本會特に請ひて之を複製し、以て世の學者の資料とせむとして幸に許諾を得たるものなり。

本書には初に天慶八年壬生忠岑の序あり。次に歌體の名目を掲げ、例歌をあげて説明を加へたるものなるが、憾むらくは最後の部分に缺くる所ありて、一體の名目と説明との缺けたることなり。本書が忠岑の著なることは藤原清輔の奥儀抄、仁安の和歌現在書目録、上覺の和歌色葉集、順徳天皇の八雲御抄等にて明かなるが、奥儀抄には凡、歌のしなは忠岑の和歌の十體、もしては四條大納言の九品、道濟の十體などにみえたり。

といひ、和歌現在書目録には

古今髓併爲二指南之弄、九品十體區分先賢之心難測。

といひて、その髓家に「九品、忠岑十體、道濟十體」とならべあげたり。かくて、公任の九品は單行本として傳へ、道濟の十體は奥儀抄に引きたるにて從來知られてありしが、忠岑の十體のみは、先にいへる如く、本書の世に公に示さるるまで、學者の研討を経ず、隨つて世の歌學史などにもこれに觸れたる研究は無かりしものなり。この十體の現存本に載する例歌はすべて四十六首なり。そのうち不明の三首を除きて見れば、古今集所載のもの二十六首、萬葉集所載のもの三首、古今六帖所載のもの三首（内一首は古今集にもあり）貫之集三首、土佐日記一首、柿本集二首、赤人集一首、伊勢集三首、公忠集一首、大鏡にある菅原道眞の歌一首なるが、之を更に作者の明かなるものにつきていへば、

貫之(五) 躬恆(四) 伊勢(四) 人麿(三) 道眞(三) 素性(二) 赤人(二) 康秀(一) 貞文(一) 敏行(一) 篁(一) 深養父(一) 仲麿(一) 二條后(一)
宗貞(一) 業平(一) 千里(一) 公忠(一) 厚見王(一)

にして、忠岑以後の人の歌は見ゆることなし。されば、その内容より見て、忠岑の作ならずとすべき點は存せずといふべし。

次にこの書の組織なるが、これは如何なるものなるかは、この書を見て直ちに知らるべきなれど、最後の一體を缺き、しかも他に傳本も聞えざれば、その一體を詳かに知らむことは難きことなり。但し、道濟の十體はこの忠岑の十體に據りて、名目其他を簡單にせしものと見えたれば二者を比較して略々その如何を推知するを得べし次にそれらを對比して示さむ。

〔忠岑十體〕

古歌體

例歌五首

神妙體

例歌五首

直體

例歌五首

餘情體

例歌五首

寫思體

例歌五首

高情體

例歌五首

器量體

例歌五首

比興體

〔道濟十體〕

古體

例歌二首（忠岑の例歌の一と二）

神妙

例歌二首（忠岑の例歌の一と二）

直體

例歌二首（忠岑の例歌の一と三）

餘情

例歌二首（忠岑の例歌の一と二）

寫思

例歌二首（忠岑の例歌の二と三）

高情

例歌二首（忠岑の例歌の一と二）

器量

例歌二首（忠岑の例歌の二と二）

比興

例歌五首

例歌二首（忠岑の例歌の一と二）

華艶體。

花體。

例歌六首

例歌二首（忠岑の例歌の一と二）

（缺）

兩方

例歌二首

以上を通じて見るに、その體の名目としては忠岑のは「直體」が二字なるのみにして、他は皆三字なり。道濟のはすべて二字にして忠岑の名目の二字なるは直ちにそれを取り、他は主として下の體の字を省きたるものにしてたゞ「古歌體」と「華艶體」とは中間を省きて「古體」「花體」とせるを見る。之を以て推すに、忠岑の最後の一體は道濟の「兩方」といへるものと同じきものなるべくして、その名目も恐らくは「兩方體」といひたるものならむか。かくて例歌は忠岑のは華艶體の下に六首あれど、他は皆五首なれば、この六首なるものは一考を加ふべき必要あり。さて又道濟の例歌は忠岑の九體に對してはそのうちの二首をとれるものなれば、兩方といへるもの例歌二首も忠岑の「兩方體」と推察せらるるものうちより採りたるものならむと考へらる。

ここにその道濟の「兩方」の例歌を見るに、

一、山たかみくもぬにみゆるさくら花ころのゆきておらぬ日そなき（この「をらぬ」は「居る」（山に）と「折る」（花を）とをかねたるかけ詞と見ゆ）

二、としをへて花のかみとなる水はちりかかるといふらん（これは「花」に對して「散り」といひ、「かみ」に對して「くもる」といへるなり）

の二首にして、一は詞の上の「兩方」といふべく、二は想の上の「兩方」といふべきものと思はる。かくてこれが、忠岑十體の例歌なりしことは推知せらるる所なるが、ここに、忠岑の華艶體の例歌が、六首あることは異例なれば、その點を顧みるに、その例歌の四首は第六紙にありて、次の二首は第七紙にあるなり。このうちの少くも一首は華艶體の例歌にあらずして兩方體のものならざるべからずとする疑を生じたり。ここにそれらの例歌を讀むに、下の二首は華艶體といふべきものにあらずして、兩方體といふべき姿の歌なり。即ち

わひしらにまはしはなきそあしひきの山のかひある今日にやはあらぬ（「かひ」は、詮ある由の「かひ」と山の峽とをかねたり）

しらゆきのともわか身はふりぬれところはきえぬものにさりける（「ふり」は雪の「降る」と身の「古る」とをかけ、「きえぬ」は雪のきえぬと心のきえぬとをかねたり）

の如くなれば、この二首は華艶體の例歌にあらずして、兩方體の例歌たることを知るべし。かくて吾人は、道濟十體の例歌とこの例歌とあはせて四首の歌を忠岑の兩方體の例歌として見ることをうべきなり。

かくの如く考定して、さて考ふるに、華艶體の次の四首は、その例歌にして、他の例に照せば、今一首の例歌あるべく、その末の二首は兩方體の例歌にして他の例に照せば、今三首の例歌あるべく、（但し、その内の二首は道濟の兩方の例歌なるべければ不明は一首に止まる）總べて四首の例歌の缺けたるを推定すべきが、更に一步を進めて見るに、忠岑のはすべて一體毎に例歌の後に説明を加へてあるものを例とするものなるが、最後の説明は上述の理由によりて華艶體の説明にあらずして兩方體の説明たるべき道理なり。而してその文をよみても華艶體の説明にあらざること明かなり。ここに於いて、華艶體の例歌四首と、その次なる例歌二首との間に、

華艶體の例歌一首（二行分）

その體の説明（一行乃至四行を例とす）

兩方體の題目（一行分）

その體の例歌三首（六行分）

の存したりしものなることを考ふべし。然るに第六紙の長さは他の紙と同じければ、この缺けたる部分は第七紙の初部分たりしならむと思はる。かくてその缺けたる部分は十行乃至十三行にして、それと、今の第七紙とにて略他の紙と長さを等しくせりしならむが、或は末の部分の多少、後世に斷截し去りしこともあらむか。

さてかく和歌をその體によりて分ちて説明することは恐らくは本書を以てはじめとするものならむが、かくの如きことは支那の詩學にその模楷とせしものあらむと考へらる。日本國見在書目録を見るに、「詩體」又「四聲八體」「續異體諸詩法」の名を見れども、それらの書、今に傳らざれば異同を辨するに由なし。文鏡秘府論にはその「論體勢」の條に十體（唐の崔融の新定詩體によるといへり）の名目ありて、それがこの十體の模範たりしにあらざるにあらねど、その直置體といふが、この直置體となりしが如く、その映帶體といふが、この兩方體に似たる點あらむかと思はるる程度のことにしてその他は、必ずしもよれりといひうべからず。又文筆眼心抄には上の十體を擴張して、廿七體を掲げたが、ここに新に見ゆるうち「比興體」の外は直接に模せりとも見えず。惟ふに、和歌に體を立て、その修辭を論ずることは崔氏の新定詩體、又文筆眼心抄等にその模楷なしとせざるべけれど、本邦にてはこの書をはじめとすべし。しかもこれは恐らくはその詩體等にその著想を得たりといふに止まりて、その體を立つることはそれに累せられず、獨自の立場より和歌を見たりと思はるれば、その點に於いて、わが國の歌學が從來漢詩學の形式的模倣に止まりしに比して一の進歩といふべくして、藤原公任の和歌九品の前驅をなすものといふべけれど、それはたゞ品第せるのみなるに、これはその詩藻を品隣せるものなれば、寧ろそれより深き點ありとすべし。況んや道濟の十體がただこれを摸して單に略せるに止まるものなるに於いてをや。而して、この後定家の和歌十體を案出せるもの、その名と實とは異なりといへども、その摸倣とするところ、ここに存することは疑ふべからず。

今、この忠岑十體はその信すべきものなること上の如し。かくてこの書を信ずとせば、從來の歌學史の上に改訂を要すべきこと生ず。その一は從來、當初の歌學は支那の詩學の模倣にして、藤原公任よりしてはじめて眞に日本の歌に即しての歌學は起れりと考へられたるに、この書の出現によりて、それよりも五六十年前に既にかくの如くわが和歌に即したるもの生じたりと見ざるべからざる點なり。その二は歌道に師資相承のはやく起りしことなり。この事は從來、中古歌仙傳の能因法師傳の中に、

和歌自昔無三師第二而能因始以三長能爲師云々

とあるにより、之を以てはじめとせるが、この書の序に、「先師土州刺史敍古今歌粗以旨歸矣」とあるを見れば、忠岑は貫之を以て師と認めしこと疑ふべからず。これによりて思ひ起すことは群書類從卷第七十九に收むる「三月三日紀師匠家曲水宴和歌」なり。この「紀師匠」が貫之たることは明かにしてこのうちの和歌を新古今集春下にとれるには「紀貫之曲水宴し侍りける時月入花灘暗といふ事を」と題して坂上是則の歌を載せ、新拾遺集春下にも同じ題詞にて壬生忠岑の歌を載せ、次に、「燈懸水澄明」と題して凡河内躬恒の歌を載せたるが、それらの歌はいづれも今の類從本にも載せたるにて明かなり。かくてその曲水宴の時の作者を見るに、貫之の外には躬恒、これひら（蓋し、藤原敏行の男なる伊衡）友則、興風、千里、忠岑なるが、いづれも貫之同時の人なり。恐らくはこれらの人々が貫之を師匠としてその門に學びしものならむことは、この序文と相照して意義動かすべからざるものあるにあらずや。次にはここに「先師土州刺史」とある以上、これを記せる時には貫之は物故せりと考ふべきものなり。然るときは貫之は天慶八年冬十月以前に歿せりといふべきなり。然るに、普通には貫之は天慶九年に歿せりとせり。これは古今和歌集目錄、三十六人歌仙傳によれるものにして、それら以外に證なきことなり。この故に本書を正しとせば、從來の天慶九年説は誤れることならむ。但し、貫之は天慶八年三月に木工權頭に任ぜられし由なれば、その年の三月より十月までの間に歿せしことならむ。以上の三項、今直ちに之を以て結論に達すべしとにあらねど、本書の出現が學界に及ぼす影響の少なからぬこと一端を示さむとてかくいへり。されど、それらの委しきことは別に論すべきことに屬す。

昭和九年八月六日

山田孝雄

昭和九年八月廿五日印刷
昭和九年八月廿八日發行

(非賣品)

發行兼印刷者 古典保存會

右代表者

東京市下谷區上野區公園地
七條 愷

印刷所 金屬版印刷所

東京市神田區花房町五番地

古典保存會事務所

電話下谷六七八八番
振替口座東京四四九四八番



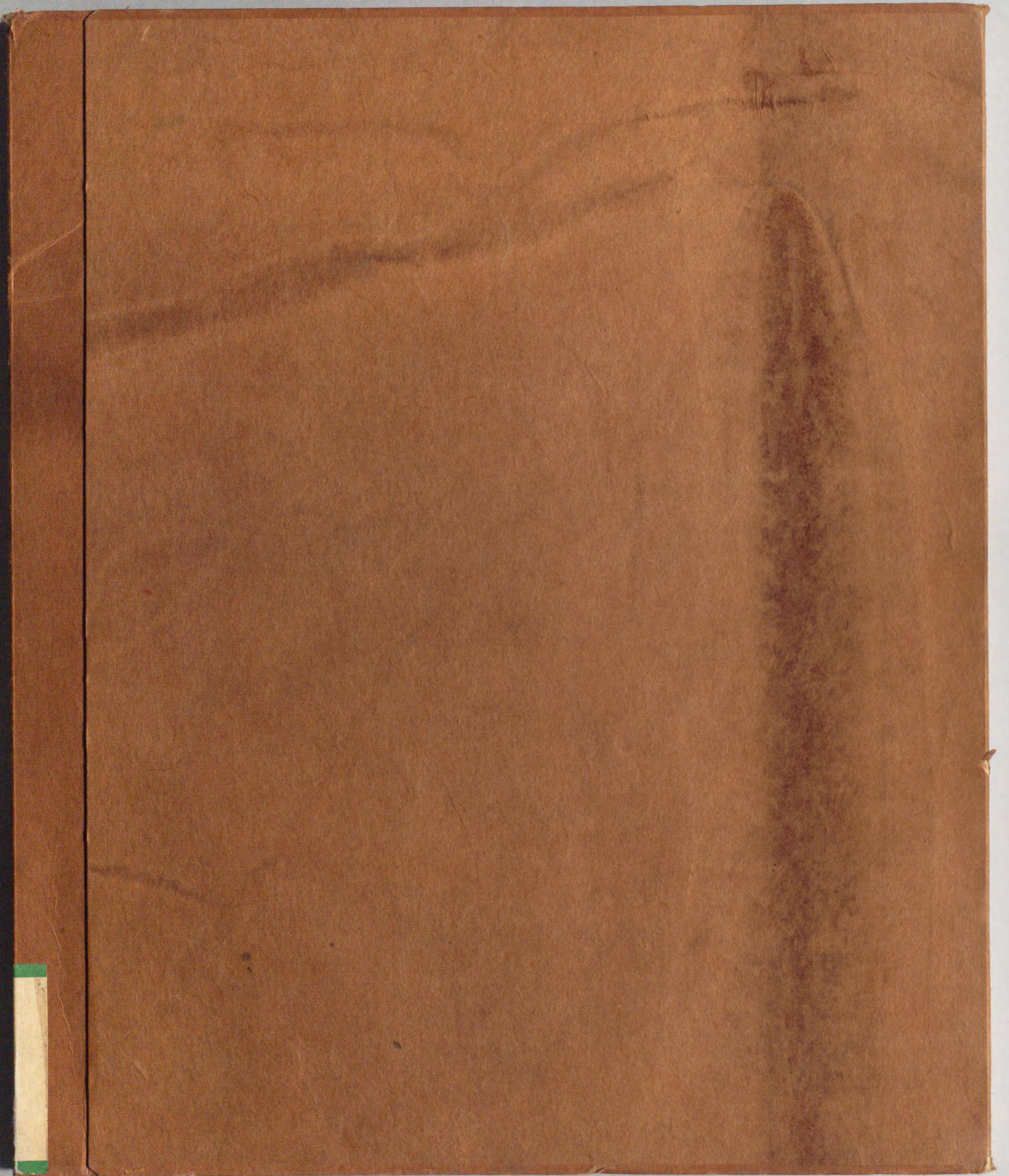
和歌體十種

911.107

911.107
M449w



00216536



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19

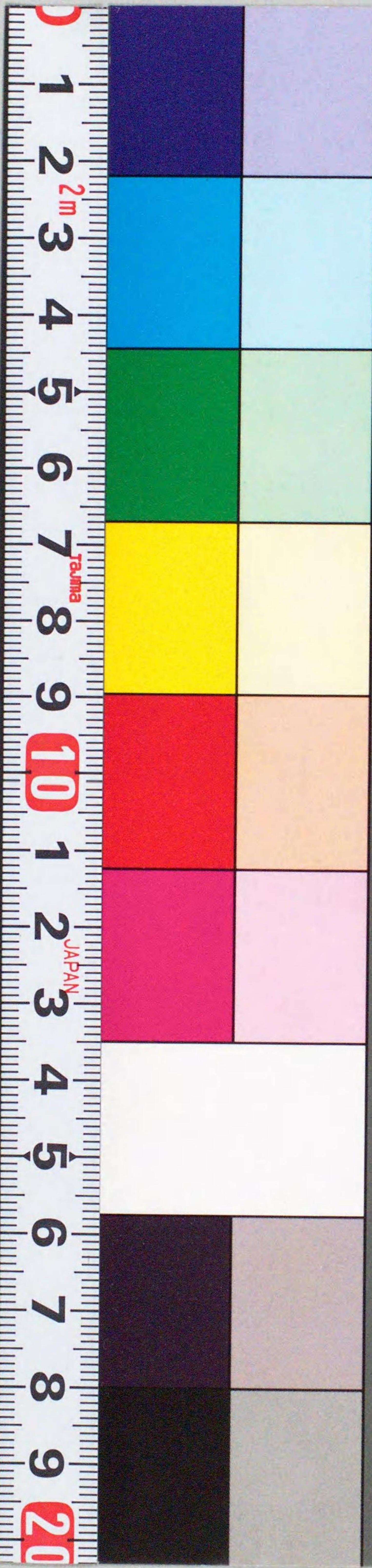
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20